

「20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか ——教育・メディア・研究」

日時：2023年8月8日（火）～9日（水）（到着日8月7日／出発日8月10日）

会場：早稲田大学14号館8階 及びオンライン（Zoom ウェビナー）

主催：日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性実行委員会

共催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

共催：早稲田大学先端社会科学研究所・東アジア国際関係研究所

助成：高橋産業経済研究財団

■ 開催経緯

「国史たちの対話」企画は、自国の歴史を専門とする各国の研究者たちの対話・交流を目的として2016年に始まり、これまでに7回開催した。国境を越えて多くの参加者が集い、各国の国史の現状と課題や、個別の実証研究をめぐって、議論と交流を深めてきた。2021年からは新型コロナ流行下でも対話を継続すべく、オンライン開催を3回試み、議論を深めることができた。

3年ぶりに対面型で開催。来られない人はオンラインで参加する。また、コロナ前と同様日中韓3本ずつ、計9本の論文発表と議論をする。

なお、今回も、円滑な対話を進めるため、日本語⇄中国語、日本語⇄韓国語、中国語⇄韓国語の同時通訳をつける。フォーラム終了後は講演録（SGRA レポート）を作成し、参加者によるエッセイ等をメールマガジン等で広く社会に発信する。

■ 開催趣旨

2016年から始まった「国史たちの対話」の目的は、日中韓「国史」研究者の交流を深めることによって、知のプラットフォームを構築し、三国間に横たわっている歴史認識問題の克服に知恵を提供することである。

東アジア歴史問題の起因は、20世紀の戦争と植民地支配をめぐる認識の違いと指摘されることが多い。しかし、公表された日韓、日中の歴史共同研究の報告書が示しているように、個別の歴史事実の解釈をめぐる違いはあるものの、20世紀東アジア歴史の大筋についての認識には大きな齟齬が存在しない。それでも東アジアの国際関係がしばしば歴史問題で紛糾している理由の一つに、相手の「歴史認識」への認識が不十分ということを挙げることができる。

戦後の東アジアは冷戦、和解、日本主導の経済協力、中国の台頭など複数の局面と複雑な変動を経験した。各国は各自の政治、社会的環境のなかで、自国史のコンテクストに基づいて歴史観を形成し、国民に広げて

きた。戦後各国の歴史観はなかば閉鎖的な歴史環境のなかで形成されたものである。各国の歴史認識の形成過程、内在する論理、政治との関係、国民に広がるプロセスなどについての情報は、東アジアの歴史家に共有されていない。歴史認識をめぐる対立は、このような情報の欠如と深く関わっているのである。

20世紀の戦争と植民地支配をめぐる国民の歴史認識は、国家の歴史観、家庭教育、学校教育、歴史家の研究と発信、メディア、文化・芸術などが複雑に作用し合いながら形成されたものである。歴史家の研究は国家の歴史観との緊張関係を保ちながらも、学校教育に大きな影響を及ぼしていることは言うまでもない。今回の対話のテーマの一つは、歴史家が戦後どのように歴史を研究してきたのか、である。戦後東アジア各国では激しい政治変動が発生し、歴史家の歴史研究と歴史認識も激しく揺れ動いた。歴史家の研究と発信の軌跡を跡づけることは、各国の歴史認識の形成過程を確認する有効な手段であろう。

映画・テレビなどのメディアも国民の歴史認識の形成に重要な役割を担っている。戦後、各国は各自の歴史観に立って、戦争と植民地に関係する作品を多数創作した。このような作品が国民の歴史認識に与えた影響は無視できない。また、メディア交流が展開されるなかで、多数の映画やテレビドラマが共同で制作された。国民同士はこれらの作品を鑑賞することで、間接的に歴史対話を行ってきた。各国の文化、社会環境が歴史認識にどう影響したのか。確認したい問題の一つである。

歴史認識をめぐる国家間の対立が発生すると、相手の歴史解釈と歴史認識の問題点を指摘することが多い。しかし、自国内に発生した政治、社会変動に誘発される歴史認識の対立の方がむしろ多い。相手の歴史認識を認識する過程は、自分の歴史認識を問い直す機会でもあろう。このような観点から、第8回の国史対話は、今までの対話をさらに深めることが期待される。

■ プログラム

※発表は20分、指定討論は5分

2023年8月7日(月)				
歓迎夕食会(18:00~20:00)				
2023年8月8日(火)				
第1セッション(9:00-10:40) : 開会 司会: 村和明				
開会挨拶	劉傑	LIU Jie	早稲田大学	
趣旨説明	三谷博	MITANI Hiroshi	東京大学名誉教授	
自己紹介	講師・指定討論者			
休憩(10:40~11:00)				
第2セッション(11:00-12:40) サブテーマ: 教育 司会: 南基正				
韓国	金泰雄	KIM Taewoong	ソウル大学	解放後における韓国人知識人層の脱植民地への議論と歴史叙述の構成の変化
中国	唐小兵	TANG Xiaobing	華東師範大学	歴史をめぐる記憶の戦争と著述の倫理——20世紀半ばの中国に関する「歴史の戦い」
日本	塩出浩之	SHIODE Hiroyuki	京都大学	日本の歴史教育は戦争と植民地支配をどう伝えてきたか——教科書と教育現場から考える
パネリスト同士の討論・参加者との質疑応答				
昼食(12:40~14:00)				

第3セッション (14:00-15:40) サブテーマ：メディア 司会：李恩民				
中国	江沛	JIANG Pei	南開大学	保身、愛国と屈服：ある偽 満州国の「協力者」の心理状態に対する考察
日本	福間良明	FUKUMA Yoshiaki	立命館大学	戦後日本のメディア文化と「戦争の語り」の変容
韓国	李基勳	LEE Kihoon	延世大学	現代韓国メディアの植民地、戦争経験の形象化とその影響－映画、ドラマを中心に
パネリスト同士の討論・参加者との質疑応答				
休憩 (15:40～16:00)				
第4セッション (16:00-17:50) サブテーマ：研究 司会：宋志勇				
日本	安岡健一	YASUOKA Kenichi	大阪大学	「わたし」の歴史、「わたしたち」の歴史－色川大吉の「自分史」論を手がかりに
韓国	梁知恵	YANG Jihye	東北亜歴史財団	「発展」を越える、新しい歴史叙述の可能性：韓国における植民地期経済史研究の行方
中国	陳紅民	CHEN Hongmin	浙江大学	民国期の中国人は「日本軍閥」という概念をどのように認識したか
パネリスト同士の討論・参加者との質疑応答				
論点整理	劉傑	Liu Jie	早稲田大学	
懇親会 (18:30～20:30)				
2023年8月9日(水)				
第5セッション (9:00-10:40) ・第6セッション (11:00-12:50) : 全体討議 (指定討論)				
司会：彭浩、鄭淳一				
	三谷博	MITANI Hiroshi	東京大学名誉教授	議論を始めるに当たって
指定討論者 (アルファベット順) : 平山昇 HIRAYAMA Noboru (神奈川大学、日本) 金 濤 KIM Ho (ソウル大学、韓国) 金 憲柱 KIM Hunjoo (国立ハンバット大学、韓国) 史 博公 SHI Bogong (中国伝媒大学、中国) 吉井文美 YOSHII Fumi (国立歴史民俗博物館、日本) 袁 慶豊 YUAN Qingfeng (中国伝媒大学、中国) 張 曉剛 ZHANG Xiaogang (長春師範大学、中国)				
閉会挨拶	趙 琯	CHO Kwang	高麗大学名誉教授	
	今西淳子	IMANISHI Junko	渥美国際交流財団	8回の国史対話ふりかえりとこれから

■「国史たちの対話」プロジェクト

渥美国際交流財団は2015年7月に第49回SGRA(関口グローバル研究会)フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、まず東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる智恵を東アジアに供給することの意義を確認した。

このプラットフォームに「国史たちの対話」のコーナーを設置したのは2016年9月の第3回アジア未来会議の機会に開催された第1回「国史たちの対話」であった。いままで3カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められていない、という意識から、まず東アジアにおける歴史対話を可能にする条件を探った。具体的には、三谷博先生(東京大学名誉教授)、葛兆光先生(復旦大学教授)、趙珖先生(高麗大学名誉教授)の講演により、3カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱われているかを検討した。

第2回対話は、自国史と国際関係をより構造的に理解するために、「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。2017年8月、北九州に日本・中国・韓国・モンゴルから11名の国史研究者が集まり、各国の国史の視点からの研究発表の後、東アジアの歴史という視点から、朝貢冊封の問題、モンゴル史と中国史の問題、資料の扱い方等について活発な議論が行われた。この会議の諸発表は、東アジア全体の動きに注目すると国際関係だけでなく、個別の国と社会をより深く理解する手掛りも示すことを明らかにした。

第3回対話はさらに時代を下げて「17世紀東アジアの国際関係」と設定した。2018年8月、ソウルに日本・中国・韓国から9名の国史研究者が集まり、日本の豊臣秀吉と満洲のホンタイジによる各2度の朝鮮侵攻と、その背景にある銀貿易を主軸とする緊密な経済関係、戦乱の後の安定について検討した。また、3回の国史対話を振り返って次につなげるため、早稲田大学主催による「和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証」のパネルディスカッションが開催された。

第4回対話は「『東アジア』の誕生－19世紀における国際秩序の転換－」というテーマで、2020年1月にフィリピンのマニラ市近郊に日本・中国・韓国から国史研究者が集まり、各国の「西洋への認識」「伝統への挑戦と創造」「国境を越えた人の移動」について論文発表と活発な議論が行われた。

第5回対話は「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」というテーマで、コロナ禍中の2021年1月に完全オンライン形式で開催され、19世紀に感染症の問題を各国がどのように認識し、いかに対応策を用意したかを見て、さらに各国の相互協力とその限界について考えた。各国からの論文発表に加え、過去4回の参加者がパネリストとして多数参加し、活発な議論が行われた。新型コロナウイルス感染症流行により、やむを得ずオンライン開催となったものの、結果としてはZoomウェビナーというプラットフォームを得ることとなり、新たな展開につながる有意義な対話となった。

第6回対話は、アジア近現代の「人の移動と境界・権力・民族」をテーマとして、第5回に引き続きオンライン(3言語同時通訳)で行われた。塩出浩之先生(京都大学教授)は問題提起で、近現代における人の移動を左右してきた国境に焦点を当て、人の移動が国家主権体制や国際政治構造(帝国主義や冷戦)と密接にかかわる点を指摘した。その後のセッションでも議論が白熱した。やや実験的に自由討論を主体に一日を費やした構成であったが、活発な議論を進めることができたと高く評価された。

第7回対話は、2022年8月に「『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」をテーマにオンラインで開催された。韓成敏先生(高麗大学研究教授)が日ごろ韓国の歴史学者の中で議論している「歴史大衆化」問題を提起され、

危機的状況にある歴史学の状況を分析、ひとつの解決方法として「パブリック・ヒストリー」を提案した。その後各国の異なる状況を踏まえて「歴史の大衆化」を多角的に検討する活発な議論が交わされた。

本プロジェクトは、フォーラム、セッションでの対話だけでなく、3言語に対応したレポートの配布とリレーエッセイのメールマガジン等により、円卓会議参加者のネットワーク化を図ることを目的としてスタートした。6年にわたる蓄積から、日本・中国・韓国の各国の国史研究者 340 人を超すネットワークとして成長している。

■ 国史たちの対話レポートのバックナンバー

第1回国史対話レポート「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2017/8730/>

第2回国史対話レポート「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2017/10611/>

第3回国史対話レポート「17世紀東アジアの国際関係—戦乱から安定へ—」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2018/14261/>

第4回国史対話レポート「『東アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2020/15991/>

第5回国史対話レポート「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」

<http://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2021/17058/>

第6回国史対話レポート「人の移動と境界・権力・民族」

<https://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2022/17575/>

第7回国史対話レポート「『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」

<https://www.aisf.or.jp/sgra/active/report/2023/18258/>

■ メールマガジンのバックナンバー

<https://kokushinewsletter.tumblr.com/>